

# 異種勉強会

## 「である」ことと「する」こと

～丸山眞男の1958年10月岩波文化講演会より～

発表者：相馬 淳一（比較政治学）

### 講演者についての知識

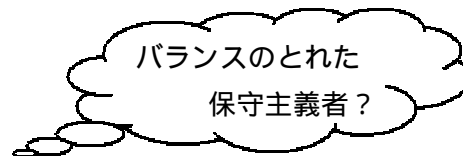
**丸山 眞男**（まるやま まさお） 1914年～1996年  
政治思想史を専門とする、戦後日本を代表する政治学者

### 主な著書

- 『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、改訂版1983年）
- 『現代政治の思想と行動』（上下）（未来社、新装版2006年）
- 『日本の思想』（岩波新書、1961年）
- 『戦中と戦後の間 1936 - 1957』（みすず書房、1976年）
- 『「文明論之概略」を読む』（上中下）（岩波新書、1986年）
- 『忠誠と反逆 転形期日本の精神史的位相』（筑摩書房、1992年）

### さまざまな評価・影響力

共産主義に傾倒した学者  
改革に突き進もうとしない保守性  
西洋近代の愚直な賛美者  
大衆から隔離した貴族的啓蒙家  
国民国家の幻像にしがみつくなショナリスト



### 講演要旨の一覧表

	静態的	動態的
	「である」社会	「する」社会
社会	伝統的	近代的
秩序	禁忌の維持	禁忌の破壊
重視	状態	過程
価値	身分・家柄・年功序列	業績・職能
対象	血縁・人種 etc	政党・会社 etc
評価	人間・集団	機能

「権利の上に眠る者」(近代的思想) ← 民主主義の精神

近代的社会では、禁忌の存在を許さず、公開で討議する過程を大切にし、その過程において必要な職能を重視し、結果その職能によって業績と評価する。きわめて機能的で合理的な精神。常に動的であり、常に検証していく社会。

失敗すると、ナポレオン三世やヒトラーを生む

民主主義は、不断の民主化によって辛うじて民主主義であり得るといような性格を本質的に持っている(制度の自己目的化・物神化を常に警戒し、監視し、批判する)。

概念実在論を唯名論に転回させ、あらゆるドグマをふるいにかけて、政治・経済・文化などの様々な領域で先天的に通用している権威に対して、現実的な機能と効用を問う。

「である」社会と「である」道徳(伝統的思想)

伝統的な社会では、禁忌で秩序を維持し、外部的に身分・家柄を峻別し、年功序列の静かな進行を望む。血縁・人種による結合を重視し、人間・集団を基準による判断を行なう。

分をわきまえること、「らしく」あることが重視され、その型枠の中で人は行動する。

アカの他人は存在せず、よって公共の道徳も存在しない。

政治社会と経済社会(伝統的社会と近代的社会の葛藤)

丸山が析出した日本の姿

経済的にもっとも深く強く「する」社会が浸透した一方で、政治的には今もなお「である」社会が執拗に存在する。

江戸時代のままの「伝統的社会」に入り込む「近代的社会」

これから求められること

「非政治的な市民の政治的関心」によって民主主義は成立する。

権力を目標としない政治的介入